

奥戸湊 至大洞湊
一里十九間
戸百二
大産 良牧 駿馬
鮑白子

大洞湊 至異國洞中
二里十五間
戸四十
大産 駿馬 鮑白子
千瀬

奥戸牧

天狗山

大松懸城湧至至尋四尋
アノ風とハ風カリ忍レ

此方り牧の中を通り鯉浦
至、進道り

大松懸洞深四尋アリ五尋
アノ風カリ忍レ
洞入口六十間ハカリ

摩天崎



大間町史



大間崎に建つ「こゝ本州最北端の地」の碑



大間崎から望む弁天島と北海道の山並み



弁天島



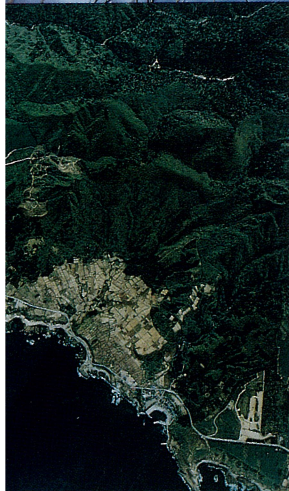
西吹付山頂からの大間崎と北海道の山々



津鼻崎の奇岩



世界最北限に生息するニホンザル



一本釣りで仕留めた440kgの大マグロ

津軽海峡のいさり火





上空から見た大間町

大間と函館の夜景





現在の大間港



函館へ100分で渡るフェリーボートはあゆ



天妃媽祖大権現



長弘寺の仁王像



大間町の花・鳥・木



はまなす

海岸に自生し、初夏に放香をはなつ「はまなす」のかれんな花、郷愁をそそる甘酸っぱい果実とともに、大間町の気候風土に適したバラ科の落葉低木として、昔から町民に愛されている。



くろまつ

大間町は「くろまつ」の北限地である。松は古来めでたい樹木として親しまれて来た常緑高木、樹齢百年を越えるものも珍しくない。潮風や雨雪にもよく耐え、雄々しい中にも気品ある姿を漂わせている。



かもめ

弁天島、津鼻崎をはじめ港、海岸にと群れとぶ優美な「かもめ」は自然現象に敏感で時化を教え、また、豊漁を告げる海鳥として昔から町民に親しまれている。

町民憲章

わたくしたちは、津軽海峡の青い海と、美しいみどりの丘と、太陽に恵まれた本州の最北の地に住む大間町の町民です。

先人の力と汗の偉業をたたえ、自然をいっくしみ郷土を愛し、自覚と責任をもって文化的でたくましく豊かで明るいうるおいのある住みよい町にするためにこの憲章を定め実践します。

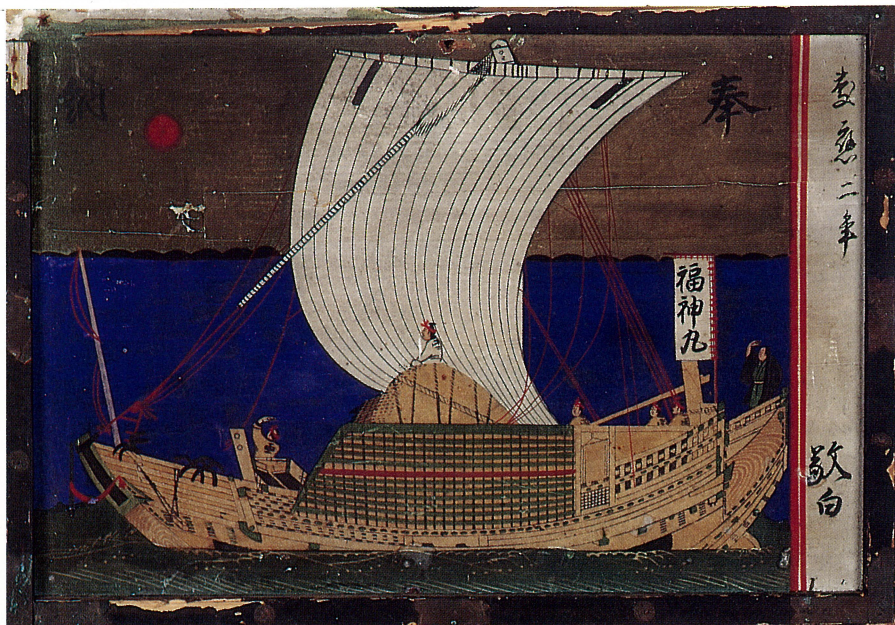
- 一、健康でよく働く豊かな町をつくりましょう。
- 一、きまりを守り、明るく住みよい町にいたしましょう。
- 一、教養と文化の高い清らかな町をめざしましょう。
- 一、互いに話し合う平和でなごやかな町をさずきましょう。
- 一、人を愛し、まことをつくす、しあわせな町に育てましょう。



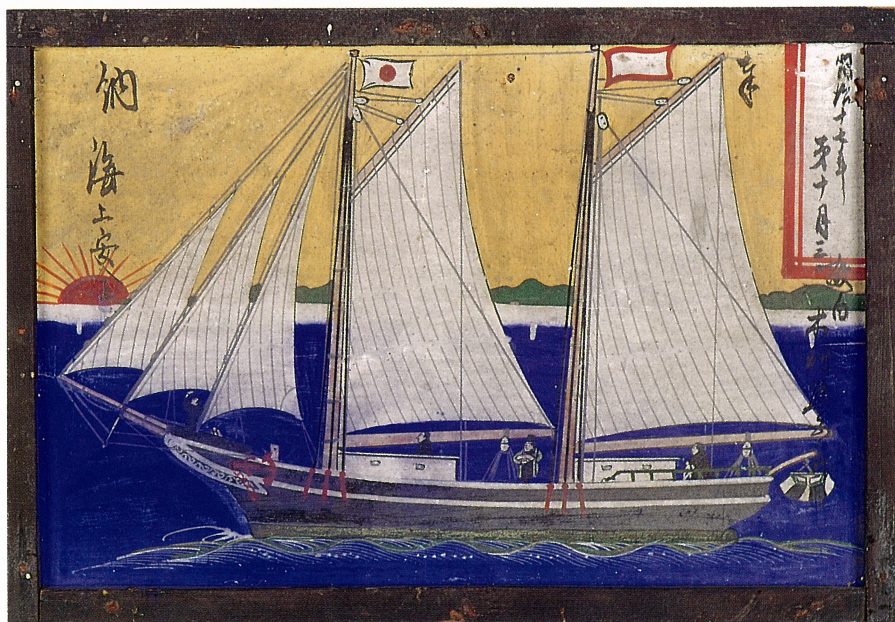
大間遺跡出土品



冷水遺跡出土品



奉納船絵馬



奉納船絵馬



大間遺跡出土の土器



大間遺跡出土の土器



現在の役場庁舎



昔の役場庁舎



奉納絵馬



奉納絵馬

歴代大奥村長・大間町長・議長

●歴代町長



第3代
高畑 熊三郎

初代
田中 元長

第2代
木村 重孝

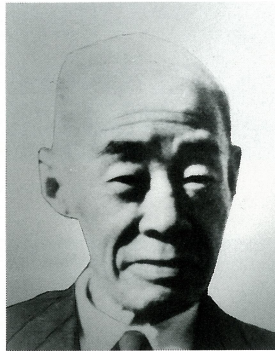
第5代
藤田政五郎



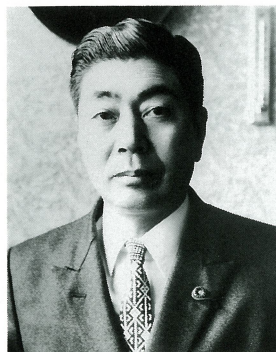
第8代
加藤 直次郎



第6代
相内 滋



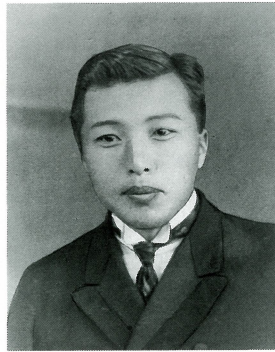
第4・7・9代
佐々木 吉三郎



第12代
金澤 幹三



第11代
中嶋 徹夫



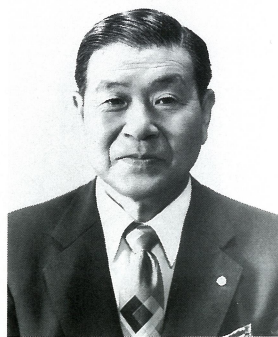
第10代
和田 兵吉



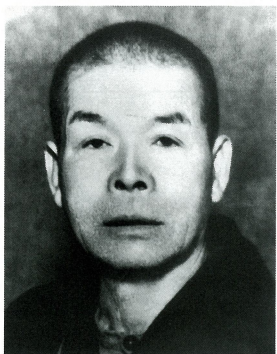
第17代
金澤弘康



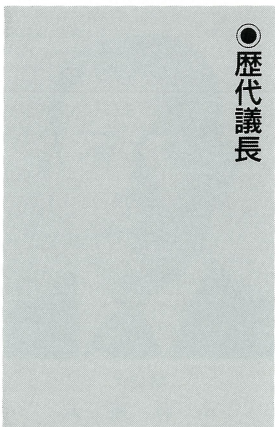
第14・16代
柳森傅次郎



第13・15代
目時正五郎



初代
岩瀬千代八



第18代
浅見恒吉



第4・5・6代
熊谷忠造



第3代
宮野正造



第2代
筑田豊八



第9・10代
大 見 義 美



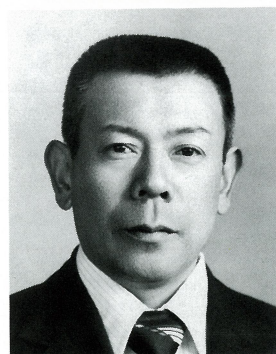
第7・8代
柳 森 傳次郎



大間町の町章
大間町を構成する3集落
(大間、奥戸、材木)を象徴
したもので、和と融を示す。



第13代
正 根 政 雄



第12代
小 林 唯 八



第11代
稲 葉 末 作



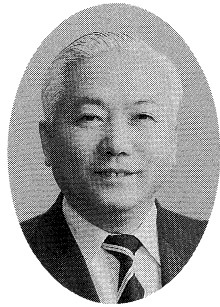
第18代
石 戸 秀 雄



第16・17代
中 島 大



第14・15代
蛸 子 隆



発刊のことば

大間町長 浅見 恒吉

平成四年、町制施行五十周年を機に記念事業の一環として、大間町史編纂に着手し、爾来五年、漸く完成し、発刊される運びとなったことは誠に喜びにたえません。

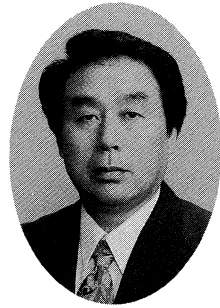
大間町においては、これまで町史と称するものがなく、まとまった資料がほとんどない状況の中での取り組みだったため、関係者には多大なご苦勞をかけたことと思います。

本町史は、読み易さに重点がおかれており、行政推進の貴重な資料として役立つばかりでなく、各方面で活用され、町民の座右の書として折にふれて愛読されることを願っております。

また、「温故知新」という諺がありますが、先人の遺業と精神を永く後世に伝え、さらに大間町飛躍発展の指針となることを願うものであります。

町史発刊にあたり、編纂委員の皆様はじめ、貴重な史・資料をご提供下さるなど編纂事業にご協力賜った各位、また、一貫してこの事業を受託してくれた第一法規出版株式会社並びにそのスタッフの皆様に、心から感謝を申し上げます。

平成九年三月



発刊を祝して

大間町議会議長 石戸 秀雄

このたび、町制施行五十周年記念事業の一環として「大間町史」が刊行されますことを、心からお慶び申し上げます。

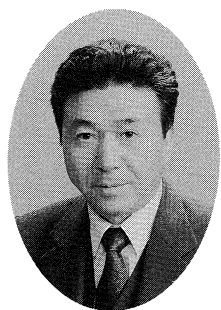
大間町は、昭和十七年の町制施行以来、恵まれた自然と先人たちの生活習慣から生まれた豊かな歴史に支えられ、幾多の時代の変遷を重ねつつ、町勢の発展を遂げてまいりました。

歴史には、それぞれ多くの教訓と先人の努力を内に秘めているものです。

こうした意味で、郷土の古い歴史と豊かな伝統、優れた文化財、先駆的人材などを明らかに記録にとどめる本書が、この記念すべき五十周年の節目の年に編纂事業に取り組まれましたことは、誠に意義深いことであり、新時代の町づくりの指針となるものと確信しております。本町史が行政推進の資料として役立っばかりでなく、未来の歴史の創造者である私達の「生きた参考書」となることを願うものであります。

発刊にあたり、調査・編集に当たられました編纂委員のご尽力、ならびに編纂業務に当たられました関係各位のご労苦に深く敬意を表し、お祝いの言葉といたします。

平成九年三月



発刊によせて

大間町教育委員会教育長 米澤 明男

私たちの郷土大間町は、本州最北端に位置し、津軽海峡を一衣帯水として対岸の北海道とは最も近い、漁業の盛んな町であります。

昔から、豊かな漁場に恵まれ、昆布、鮑、うに、まぐろの産地として知られ、とりわけ「乾鮑」と「まぐろの一本釣り」は有名で、海外にまでも名声を博してきました。

郷土の歴史を訪ねるとき、私たちの父祖が、自然につつまれ、育てられ、恵みを受けて様々なものを生みだし、暮らしを豊かにしてきた苦闘の跡が偲ばれます。その中で、営々として築いてきた産業、経済、伝統文化や信仰が「海」を根源としていることは、ご承知のとおりであります。

しかし、「漁業の町大間」がどんな歴史をたどって今日に至ったかは、町民の多くに知られていません。

近年、どここの市町村でも郷土史の編纂が盛んな中にあつて、私たちの町は昭和十七年十一月三日に「大奥村」から「大間町」に町名を改称し、町制施行以来、半世紀を過ぎようとしている時、町史の刊行が諸般の事情からなされておりませんでした。

それまで、町の沿革、事跡を記したのものとしては大正四年に「大奥村誌」、昭和十年に「自力更生の原理」な

どが出版されていますが、時の経過と共に散逸し、わずかに郷土史研究家によってその一部が保存されているだけで、多くの町民の目にふれる機会はありませんでした。

こうしたことから、大間町教育委員会は昭和五十七年町制施行四十周年を記念して「大間町沿革史年表」を刊行し、後日に備えて町史編纂の基礎資料づくりをいたしました。

以来、町史編纂は懸案の大事業として早期着手が切望されておりました。

平成四年に至り、金澤弘康前町長が、これが着手の決断実行に踏切り、町議会の全面的賛同を得て、町制施行五十周年記念事業として五か年計画で編纂を進めることになったのであります。同年七月、編纂委員会を委嘱すると共に編纂の企画、史・資料収集、調査、執筆、出版に至るまでを全国各地の史誌制作に携わってこられた第一法規出版株式会社に委託し、編纂事務局として教育委員会があたることになりました。

編纂にあたっての基本方針として

一、より多くの町民に親しまれ、未永く活用され得る町史を刊行する。

二、収集した歴史資料を政治、経済、文化等に体系付けて網羅した通史とし、一〇〇〇ページを目途とする。

三、公正な史観に基づき、あくまでも大間町の歴史を中心にとらえ、広く一般町民の目にふれるものとし、中学生でも理解でき、利用できるものとする。

の三点に特に意を用いることにしました。

しかしながら、いざ編纂作業に取り掛かると、町史編纂の決め手となる肝心の史・資料が不足なうえ、消散して収集ができず、そのため、専門委員として熱意をもって執筆にあたられた先生方の意を削ぐような事態を招きました。また、特別に監修者を置かなかつたために、執筆内容の確認作業に戸惑いも生じました。

幸い、当町の郷土史研究家熊谷正之氏をはじめ佐々木多喜郎氏、宮野次郎氏の三人の編纂委員の特段のご努力により、こうした溝を埋めることができ、計画どおり刊行にこぎ着けることができました。

本書は「通史編」として、現存する史実に基づき、より完全なものと願った訳であります。不明な点も多く、また、内容が平易に流れ、記述不足で、物足りないところのご指摘を受けるかもしれません。この点については、編集方針や前述の事情によるもので、ご了承くださるようお願いいたします。

不明な記述は、後の研究者にゆだねることとし、また、各分野の深化については後日の編纂に待ちたいと思います。

この町史が広く町民に親しまれ、愛読され、明日の郷土大間町発展の土台を築く一助となれば幸いと存じます。最後に、誠心誠意編纂事業にあたられた第一法規出版株式会社、また、本務多忙のなか編纂にご尽力された編纂委員各位、史料提供をはじめご助言をくださった関係各位に対して厚く感謝の意を表します。

平成九年三月

凡 例

- 一 『大間町史』は全一卷とし、本町の自然環境、歴史、行財政、産業経済、教育、社会福祉、文化などについて、全一二章と年表で構成した。
- 二 記述内容は、おおむね平成六年（一九九四）までとした。
- 三 表現を平易にするため、原則として内閣告示「常用漢字表」「現代片名遣い」「送り仮名の付け方」によったが、必ずしも引用文などでは統一しなかった。
- 四 難読の地名・人名・専門用語などには、読者の便を配慮してできるだけ振り仮名（ルビ）を付した。
- 五 年号は原則として和暦を用い、適宜その下に（ ）で西暦を示した。
- 六 度量衡は原則としてメートル法によったが、ところによっては尺貫法を用いた。
- 七 図・表・写真の番号は各章ごとの通し番号とした。
- 八 本文中の敬称は原則として省略した。
- 九 本書を執筆するに当たって参考、あるいは引用した主要な文献は、末尾に「主要参考文献」として掲載した。

大間町史 目次

口 絵

発刊のことば

発刊を祝して

発刊によせて

凡 例

第一章 大間町の自然環境 1

第一節 位置と地形 3

一 位置と面積 3

本州の最北端に位置する町 3 対岸の北海道に最も近い町 4

二 地形と海岸線 7

低い山々と小さな河川 7 延々続く海岸段丘 8

岬の数々と広大な原野 10

三	地質と火山岩	12
---	--------	----

	多彩な火成岩から成る地質	12
--	--------------	----

第二節	気象と海流	14
-----	-------	----

一	気温	14
---	----	----

	下北半島の陸と海	14
	冬暖かく夏涼しく	15

二	風向きと風速	17
---	--------	----

	西風と東風と南西風が多い	17
	冬には強く吹く偏西風	20

三	雨と雪	21
---	-----	----

	梅雨より多い九月の降雨量	21
	降雪も積雪も少ない町	22

四	海流と潮流	23
---	-------	----

	二つの流れの強い影響	23
	海流と潮流の漁業への影響	24

	海底地形と海水の温度	25
--	------------	----

第三節	大間町の動物	29
-----	--------	----

一	哺乳類	29
---	-----	----

	大間町奥戸川上流での調査	29
	大間町に生息する哺乳動物	30

二	北限のサル	31
---	-------	----

	二重の北限、下北のサル	31
	下北のサルの行動範囲	32

	サルの食物と栄養状態	33
	気温の問題と造林計画	34

サルの寿命と増加する頭数 35

三 鳥 類 37

鳥の渡りの主要コース 37 大間町で見られる鳥類 38

四 魚介類 40

四季を通じて豊かな海産物 40 大間を北限とする海の動物 41

第四節 大間町の植物 43

一 下北の植物相 43

ブナとヒバが基本の林 43 森林とともに変わる植物 44

山地植生と林相の構成 45

二 珍しい植物 47

二種類ある珍しい植物 47 屏風立岩は植物の宝庫 48

下北半島の高山植物群 49 氷河期から生きる植物 50

三 海 藻 51

海の植物と北限の海藻 51

第二章 大間町の歴史 53

第一節 縄文時代以前の大間 55

第二節

古代の大間

一 弥生文化と続縄文文化

北上する稲作文化 62 南下する続縄文文化 63

青森県内での稲作の始まり 64 下北半島での弥生時代前期 65

下北半島での弥生時代中期 66 下北半島での弥生時代後期 67

弥生時代後期の大間の遺跡 68

二 東北北部の古墳時代

空白に近い古墳文化 69 大和文化と北海道文化 70

青森県内の古墳と遺物 71 古墳文化に伴う出土品 72

北海道式古墳と北大式土器 73 古墳時代と国土の統一 74

五世紀以降の社会背景 75

三 大和政権の北進と蝦夷

蝦夷六人への冠位授与 76 阿倍比羅夫の蝦夷討伐 77

肅慎人との交流と戦い 78 オホーツク式土器の南下 79

肅慎・靺鞨とアイヌ・蝦夷 80 毛人と表記された蝦夷 81

エミシからエビスへ 82

郷土の形成と経緯 55 先史時代の大間町 55

大間町内の縄文遺跡群 56 縄文時代晩期の大間町の遺跡 59

62

62

69

76

四 奈良・平安時代と蝦夷 83

律令国家の形成と展開 83 相次ぐ蝦夷たちの反乱 84

服属と離反を繰り返す蝦夷 85 坂上田村麻呂と安達小佐丸 86

渡島の蝦夷と元慶の乱 87 前九年の役、後三年の役 88

五 古代の下北半島の生活と文化 89

青森県下の古代住生活 89 笹沢魯羊と竪穴住居群 90

下北半島の竪穴住居跡 91 日常生活用具や食料 92

擦文土器の地域的特色 93 下北半島の擦文土器群 94

割石遺跡の擦文土器 95 製塩土器と各種鉄製品 96

墨書土器と生活の向上 97

第三節 中世の大間 99

一 宇曾利郷の誕生 99

『陸奥話記』の地名・宇曾利 99 「郷」ではなく「都」との記述 100

安藤宗季讓状「新渡部文書」 101 諏訪大明神画詞、熊野那智山願書 102

半島北部は伝承の世界 103 佐井の地名と大間の起こり 104

二 鎌倉時代の下北半島支配 105

藤原氏から南部氏へ 105 大河次郎兼任の最後の抵抗 106

鎌倉御家人と地頭制の浸透 107 安東一族の下北支配へ 108

順法寺城と十三湊新城 109 文永の役と弘安の役 110

三 南北朝・室町時代の下北 111

鎌倉幕府滅亡と建武の新政 111 北一八郡の国代南部又次郎師行 112

根城の興隆と南部氏の支配 113 南北朝から室町幕府へ 114

足利尊氏勢と南部勢の抗争 115 宇曾利郷の支配の変遷 116

五代続いた北部王の系譜 117 南部氏の興亡と安東氏滅亡 118

北部王の統治と大間町周辺 119

四 蛭崎の乱と大間町の始まり 120

武田藏人と義純王謀殺 120 錦帯城築城と蛭崎藏人 121

悪戦苦闘の南部政経軍 122 奥戸貴太夫と蛭崎軍の敗北 123

大間の起こりと奥戸の発展 124 大間と奥戸の地名の由来考 125

蛭崎の乱後の下北半島 126 蛇浦から別村となった大間 127

論功行賞にない奥戸貴太夫の名 128 田名部三〇〇石加封と義祥王 129

天文学的数字の蛭崎側財宝 130 乱後の半島と室町幕府滅亡 131

五 北奥の文化とアイヌの動向 133

五〇〇に及ぶ中世の城館 133 根城の構成と中国陶器 134

田名部館の規模と遺物 135 鶴ヶ崎山順法寺城の三重濠と遺品 136

蛭崎城の繁栄示す出土品 137 四十八館とアイヌ伝承 138

第四節

近世の大間

和人とアイヌの戦争の伝承 139

アイヌの足跡と中世の下北 140

一 統一政権と北奥

近代西欧文化と織豊政権 142 北奥の領主権力南部氏と津軽氏 143

九戸政実の乱と北奥の大名 144 統一政権下の下北半島 145

下北半島がない日本図 146 関白秀吉の野望の終焉 147

二 江戸時代の下北半島

一〇郡一〇万石の南部領の成立 148 北郡田名部通と代官所設置 149

盛岡南部氏の地方行政組織 150 南部藩の村政と五人組制 151

流刑地としての下北半島 152 田名部通上地事件 153

上地命令の取り消し 154 南部藩の四大飢饉 155

白米の輸入と稗作専業 156 南部藩政の中の田名部通の位置 157

三 田名部通の中の大間周辺

材木・奥戸・大間の成立 158 江戸時代の大間の人口 159

大間周辺の村との比較 160 大間周辺の出稼ぎ状況 160

「松前稼ぎ」と漁場の労働力 162 松浦武四郎の見た大間周辺 163

伊能勘解由の見た大間周辺 164 菅江真澄の見た大間周辺 165

大間周辺の村勢と生活 167 若い男女のラブレター 168

四 田名部通の産業と大間周辺 169

南部藩の伝統と糠部の駿馬 169 南部藩の馬政と牧畜の流れ 170

大間と奥戸の精良馬の飼育 171 奥戸野と大間野の両牧について 172

稲作の不振と稗作農業 175 ヒバ山大改革と林業の盛衰 176

漁業の変遷と大間周辺 177 大間独特のイワシ網漁 178

イワシ以外の漁獲生産 179 田名部通の廻船問屋 180

五 下北半島の海運と繁栄 182

海上交通と船の変遷 182 江戸初期の下北の海運 184

下北の諸港と流通体制 185 廻船問屋の本業の拡大 186

下北半島と北回り海運 187 大間と奥戸両湊の発展 188

長崎俵物の移出と大間 189 大間の海商と漁民たち 190

六 北方警備体制と幕末の動向 192

異国船の出没と遠見御番所 192 沿岸警備の強化と台場 193

箱館航路と砲台の設置 194 大間周辺の人馬の往来 195

和親条約と異国人上陸 196 異国船遭難と海難史の異聞 197

下北半島の幕末の動向 198

第一節 沿革 203

南部藩から斗南藩へ 203 廃藩置県と青森県の誕生 204

第二節 行政機構 207

一 新制度 207

壬申戸籍 207 地租改正 208 大区小区制の実施 209

二 県政 210

最初の県会 210 最初の県会議員選挙 211

三 町村制施行 213

大奥村の誕生 213 役場の移転 215

四 大間町の誕生 215

町村施行への機運 215 大間町の誕生 216 町村施行の祝賀 217

戦時下の町政 222 翼賛選挙 223

五 戦後の町政 225

初の民選町長 225 『町報大間』の発刊 225 戸井町との姉妹町締結 226

台湾虎尾鎮との友好姉妹都市締結 228 移動役場―行政相談 231

町民憲章・町の木・町の花・町の鳥の制定 231 町村施行四〇周年 233

町村施行五〇周年 237

六 「第三次大間町総合計画」の策定 239

現状と問題点	240
施策の方向	242

七 大間町水産振興計画・大間町地域振興計画	243
-----------------------	-----

八 原発誘致	250
--------	-----

原発調査室の設置	250
大間原子力発電所計画	250

発電所計画の変更	254
----------	-----

九 歴代町(村)長・助役・収入役	256
------------------	-----

歴代町(村)長	256
歴代助役	258
歴代収入役	259

第三節 人口と戸数	261
-----------	-----

一 人口の推移	261
---------	-----

江戸期の人口	261
明治期の人口	263
大正期の人口	264

二 昭和期の人口	266
----------	-----

三 昭和三十年以降	267
-----------	-----

第四節 議会	271
--------	-----

一 明治期の村議会	271
-----------	-----

草創期	271
大奥村会議員	272

二 大正期の村議会	281
-----------	-----

三 昭和期の村議会・町議会	283
---------------	-----

大奥村議	283
村議会から町議会へ	284
議会組織	289

歴代議長	290
歴代副議長	291
常任委員会の設置	292
常任委員会の変遷	296

第五節 財政	298
--------	-----

一 明治期の財政	298
----------	-----

二 大正期の財政	305
----------	-----

三 昭和期の財政	312
----------	-----

四 財政計画	319
--------	-----

現状と問題点	319
施策の方向	346

五 平成の財政	349
---------	-----

第六節 戦争と大間町	351
------------	-----

徴兵令	351
兵役法	351
戦争の記録	352
日露戦争と大間町	352

戦時体制	354
勤労働員	357
疎開と空襲	358
豊国丸の沈没	358

戦没者	361
-----	-----

第四章 防災・防犯	369
-----------	-----

第一節 消防	371
--------	-----

一 初期の消防	371
---------	-----

消防組の設立 371 女子消防応援団 372

二 警防団 373

国土防衛の任務 373 戦時下の警防団 374

三 消防団 376

戦後の消防組織 376 消防器具の変遷 378

独自の組織 379

四 広域消防体制 380

時代の要請 380 大間消防分署 381 大間消防署 382

五 奥戸・大間の大火・災害の記録 383

第二節 海難 388

一 激しい潮流 388

大間崎灯台の建設 388 大間救護所の開設 390

二 海難史 390

外国船 390 日本船 392

第三節 警察と裁判所 393

一 明治維新後の警察 393

邏卒から巡査へ 393 警察署の誕生 394 大間警察分署 394

大間警察署 395 警防団 395 経済警察 395

第五章 産業經濟の興隆 405

第一節 農業 407

一 明治・大正期の農業 407

苦難の米づくり 407 凶作と外米 408

二 昭和期の農業 409

農村の窮状 409 満蒙開拓青少年義勇軍などの渡満 410 戦時中の農業 411

戦後の農地改革 411 農業団体の発足と農地開発 412 新釜土地改良区 412

大間土地改良区 413 大間増反者開拓組合 415 大間町畜産農業協同組合 415

農家戸数と農家人口 417 耕地面積 419 減反政策 419

農業生産額・生産農業所得 421 冷害対策 421 冷害の記録 422

稲作 423 畑作・野菜 424 畜産 426 開拓の記録 427

第二節 林業 432

二 明治維新後の裁判所 396

三 戦後の警察 396

自治体警察の発足 396 交通事故対策 397 大間町の交通事故 398

歴代警察署長 398

第三節

一	明治・大正期の林業	432
	下北のヒバ	432
	藩有林から国有林へ	432
	国有林解放運動	433
	植林事業	434
二	大間営林署	435
	沿革	435
	大間営林署歴代署長	437
	林業経営	439
	林業団体	439
	特用林産物	439
	将来への展望	440
水産業		441
一	特色ある漁業	441
	藩政期の漁業	441
	大間鰯網仲間儀定	442
	長崎俵物	447
二	明治期の漁業	448
	イワシ漁	448
	漁業契約	448
	漁師の育成	449
	大奥村内における契約	450
	漁獲高	452
	漁具の改良・発明	452
	漁業組合	454
	大間水産補習学校	456
三	大正期の漁業	457
四	昭和期の漁業	459
	大間町の特殊性	459
	底曳網漁業への対抗策	462
	アワビ漁救済資金	463
	大間漁業組合の更生案	464
	漁業協同組合と漁業会	466
五	漁業協同組合の活動	467

漁業協同組合の発足 467 潜水漁法 468 つくり育てる漁業 469

コンブ養殖試験 470

六 将来への展望 472

現状と問題点 473 施策の方向 482 マグロの一本釣り 486

歴代組合長 489

第四節 商工業 490

一 明治期からの動き 490

大間商業組合 490 大間鍛冶工組合 491 鉱業 491

二 大間商工会 492

創立 492 歴代商工会長 493

三 将来への展望 494

商業 494 工業 499 産業および産業構造の変化 504

第五節 大間・奥戸牧場の歴史 507

源頼朝の軍馬飼育 507 藩営牧場 508 野馬飼と里飼 510

明治維新後の飼育状況 511 畜産の現状 512

第六節 観光と特産品 514

観光 514 特産品 516 将来への展望 516

第六章 交通・通信 523

第一節 陸の交通 525

一 北通の村落と道路事情 525

一本道で結ばれた村落 525 田名部から大間經由牛滝村 527

大間から材木までの道筋 529

二 明治・大正期の交通 531

半島開発は鉄道敷設で 531 陸の孤島に乗合自動車 532

二転三転し大畑線開通 534

三 幻の大間鉄道 536

今も生きる幻の記念碑 536

四 乗合バスの時代 541

鉄道に食われた乗合自動車 541

五 国道 543

国道二七九号大間バイパス 543 下北半島一周国道の実現 544

六 本州北海道連絡橋構想 545

第二節 海の交通 548

一 大間港の地理的特色 548

古くから海上警備の重要地	548
大間要塞の建設事情	550
明治初期の船便	553

遠近距離に活躍した弁財船	553
--------------	-----

定期船就航	555
-------	-----

昭和四年に初の定期船	555
フェリーボートの就航	557

大間港修築工事	563
---------	-----

乗降船客数一五〇万人	563
修築費総額四八万円	565

第三節 弁天島と灯台	568
------------	-----

一 弁天島と信仰	568
----------	-----

全島岩石から成る小島	568
海上安全の弁天信仰	569

二 大間崎灯台	571
---------	-----

総合灯台から無人化へ	571
歴代大間崎灯台所長	573

第四節 通信	575
--------	-----

一 大間町の郵便	575
----------	-----

通常郵便の集配開始	575
欠航続きで遅配滞留	577
大間郵便局のあゆみ	578

大間郵便局歴代局長	580
奥戸郵便局のあゆみ	581
奥戸郵便局歴代局長	582

二 大間町の電話	582
----------	-----

加入者数五〇〇〇を超す	582
-------------	-----

第七章 環境の整備 585

第一節 住宅 587

一 公営住宅のあゆみ 587

二 六年間で一〇九戸を建設 県平均を上回る室数 588

二 住宅計画 589

老朽住宅の再建築急ぐ 589

第二節 上水道事業 591

一 上水道事業のあゆみ 591

簡易水道完成と浄水場 水使用量の増加と今後 592

二 基本計画と奥戸ダム 593

給水量四四〇〇トンへ 593

第三節 電気・石油事業のあゆみ 596

一 大間町の電気 596

大間に電気がついた日 596

二 大間町のテレビ 597

難視聴域の解消が先決 597

三 大間町の石油・ガス 598

第四節

衛生事業のあゆみ

一 ごみ処理体系の現況

端境期に來たごみ行政 599

二 最終処分場の新設

平成七年で埋立地満杯 602

三 下水道とし尿処理

課題山積の下水道行政 604 大間に一六〇キロリットル中継槽 605

全量収集を目標に整備 606 正しく使いたい浄化槽 606

四 墓地と葬斎場

適正管理と公園化を 607 近代設備の葬斎場完成 608

第五節

町づくりの基本方針

一 将来像の設定

平成十年を目標に策定 612 豊かで活力ある町づくりを 612

二 土地利用と水資源

限りある資源の活用方法 613

三 交通・港湾・通信

地域活性化を図るもの 614

四 農業

614

第八章 教育の振興 619

第一節 近代教育へのあゆみ 621

一 明治以前の教育 621

神道と仏教による教育 621 江戸末期の寺子屋教育 622

二 明治から大正へ 623

大間小学校の始まり 623 存亡の危機乗り越えて 624

脱寺子屋から近代的教育へ 626 奥戸小学校の始まり 627

歴代校長と村民の熱意 628 奥戸小学校の材木分校設置 630

三 大正から昭和へ 631

西洋式近代校舎の建設 631 大正デモクラシー教育 631

郷土に根ざす教育 633

四 戦時中の教育 635

具体策の実行が急務 614

五 林業 615

特用林産物の栽培促進 615

六 その他の構想 616

日中戦争から太平洋戦争へ	635
戦後の教育	638

敗戦処理と混乱の日々	638
新制大間中学校の開校	640
県立大間高等学校の草創期	642
県立大間高等学校開校	645
大間幼稚園の開園とあゆみ	648
六三三制実施と新教育への模索	639
新制奥戸中学校の開校	641
独立高等学校へのあゆみ	644
奥戸小学校材木分校の開校	646

学校教育の現況と課題	649
------------	-----

創造性豊かな人材教育	649
奥戸小学校の現況と課題	652
奥戸中学校の現況と課題	655
特殊学級の現況と課題	659
大間小学校の現況と課題	650
大間中学校の現況と課題	654
大間幼稚園の現況と課題	657

大間町の各学校の学校自慢	660
--------------	-----

大間小学校の学校自慢	660
大間中学校の学校自慢	663
大間高等学校の学校自慢	665
奥戸小学校の学校自慢	662
奥戸中学校の学校自慢	664

歴代校長・園長	667
---------	-----

大間町立大間小学校歴代校長	667
大間町立奥戸小学校歴代校長	668

第二節

学校教育の諸団体

大間町立大間中学校歴代校長	669
青森県立大間高等学校歴代校長	670
大間町立大間幼稚園歴代園長	670

一 大間町教育研究会

学校の枠を超えた活動	671
------------	-----

二 大間町生徒指導連絡協議会

学校と家庭を結ぶ援助活動	672
--------------	-----

三 北通地区学校警察連絡協議会

一町二村の学校と警察とを結ぶ	673
----------------	-----

四 北通地域生徒指導・非行防止推進協議会

地域ぐるみの共同指導活動	674
--------------	-----

五 大間町学校保健会

児童生徒の健康を守る	675
------------	-----

六 大間町校長会

大間町教育の充実を図る	676
-------------	-----

七 大間町教頭会

町内各校の連絡と調整	677
------------	-----

八 大間町就学指導委員会

心身障害児の就学指導 678

九 大間町三者協議会（懇話会）

教育現場と町の懇話会 679

一〇 小・中学校連携研究会

大間町教育の課題を語る 680

一一 小中高生徒指導連絡協議会

高等教育への小中高の連携 681

一二 PTAの活動

学校と父母と教師との連携 683 青少年赤十字活動 683

第三節 児童・生徒の実態

一 マルチ検査から見た実態

大間中学校の調査から 684 奥戸中学校の調査から 686

二 保健統計から見た実態

児童・生徒の体格とむし歯 687

三 進路状況から見た実態

高校進学率上昇の推移 690 就職希望率の低下と推移 691

第四節 社会教育の諸活動

一 社会教育の現状

693

693

684

生涯学習の目標の下に 693 幼少年から高齢者まで 694

文化活動と体力づくり 696

第五節 教育行財政 699

一 大間町の総合教育計画 699

教育内容と施設の整備 699 学校教育の問題と施策 700

社会教育の問題と施策 706 社会教育年間計画 711

二 教育予算 711

大間町予算の中の教育予算 711 歴代教育委員 721

歴代教育委員長 723 歴代教育長 723

第九章 伸びゆく社会福祉 725

第一節 住民福祉計画 727

一 児童福祉対策 727

大間保育園 727 奥戸へき地保育所 728

保育所施設の整備に向けて 729 季節保育所と児童公園 730

二 老人福祉対策 731

高齢人口比の急速な進展 731 老人クラブ結成と活動 732

老人への各種サービス事業 734

三 心身障害者（児）福祉対策 736

心身障害者（児）の実態 736 重度身障害者への助成と事業 737

四 母子・父子家庭福祉対策 738

母子家庭の推移と実態 738

五 出稼ぎ労働者対策 740

出稼ぎ世帯の推移と実態 740

六 低所得者対策 742

低所得者の推移と実態 742

七 社会保険の充実 744

国民健康保険の推移と実態 744 国民年金の推移と実態 745

第二節 保健と医療 747

一 医療施設 747

明治時代の医療施設 747 終戦までの医師と疾病 748

戦後の状況と大間病院 749 大間病院の新築と移転 750

医療施設と患者の推移 751

二 保健衛生 752

死亡率低下と成人病の急増 752 母子保健と「健康大学」 753

第三節

老人保健福祉計画

一 大間町の高齢者の現状

健康で生きがいのある町づくり 756 高齢者生活実態調査の実施 757

高齢者人口構成と推移 758 高齢者世帯の推移と現状 758

援護を必要とする老人 759 寝たきり老人と介護の状況 759

主な介護者の状況と問題点 760 受診の状況と疾病構造 760

高齢者の居住形態 761 就業と収入と生きがい 761

二 サービス提供の現状と評価

ホームヘルプサービス事業 762 デイサービス事業への期待 763

老人ホームへのショートステイ 763 日常生活用具給付・貸付事業 764

健康教育と健康相談 764 健康診査の受診状況 765 機能訓練と訪問指導 765

老人ホームなどへの入所状況 767 保健福祉施設の整備状況 769

在宅医療サービス 769 相談サービスの内容と状況 770

民間サービスなどの実施状況 770 マンパワーの確保状況 770

高齢者サービス調整チーム状況 771

三 目標年度の高齢者サービス

目標年度の推計人口 771 目標年度の要介護老人 771

在宅サービスの目標と必要度 772 その他の整備目標 772

第一〇章 宗教

第一節 下北の宗教

保健サービスの目標と整備	773
サービス提供体制	774
サービス提供の施設の確保	774
サービス利用を容易にする方策	776
保健福祉の環境整備	777
保健・医療・福祉の連携	777
関係団体との連携強化	780
高齢者生きがい対策の推進	780
老人クラブと生きがい対策	780
高齢者の就労促進	781
その他の高齢者保健福祉	781
在宅介護の支援策	781
高齢者への新規事業	782
神社・寺院の組織と発展	785
組織持たない修験が主役	787
寺院形成が遅れた大間	787
恐山信仰	789
円仁が開基した神秘の霊場	789
死霊を呼び出すイタコ	790
目的が異なる季節の祭典	792
生き続けるオシラ様信仰	793

三	大間の信仰	794
---	-------	-----

漁師の心に宿る信仰の原型 794 海難救助の女神・天妃信仰 794

菅江真澄の『大間天妃縁起』 795 天妃様は水戸から来た 796

第二節	神社と寺院	798
-----	-------	-----

一	大間町の神社	798
---	--------	-----

修験者から地元信仰へ 798 (一) 稻荷神社(大間) 798

(二) 春日神社(奥戸) 799 (三) 稻荷神社(奥戸) 801 (四) 稻荷神社(材木) 801

(五) 弁天神社(大間) 801 (六) 春日弁天神社(大間) 802

二	大間の寺院	802
---	-------	-----

町民が育ててきた仏教 802 (一) 無量山阿弥陀寺 803 (二) 大潤山福蔵寺 804

(三) 法香寺 805 (四) 松尾山円融寺 806 (五) 林清山信願寺 806

(六) 梅香山崇徳寺 807 (七) 海雲山長弘寺 808 (八) 松濤山法性寺奥戸分院 811

第二章	文化財と民俗	813
-----	--------	-----

第一節	文化財と史跡	815
-----	--------	-----

一	町の文化財調査活動	815
---	-----------	-----

町指定文化財候補 815

二	文化財	820
---	-----	-----

	下北の庚申信仰は一七世紀末ごろ	820
--	-----------------	-----

	四つの寺院にある半鐘	822
--	------------	-----

三	史跡	823
---	----	-----

	遠見番所と台場の建設	823
	七郎潟と館の跡	824
	陸海軍防衛施設跡	824

四	石と碑	825
---	-----	-----

	津波を止めた蒼前石の神秘	825
	飢饉を救った浄水盤の話	826

	奇跡の霊験、金剛院の碑	826
--	-------------	-----

第二節	伝承文化	829
-----	------	-----

一	郷土芸能	829
---	------	-----

	(一)大間稻荷神社大神楽	829
	(二)大間稻荷神社御神輿	830

	(三)大間稻荷丸囃子	830
	(四)大間仁和賀山囃子	830
	(五)大間大正山囃子	831

	(六)大間弁天丸囃子	831
	(七)奥戸春日神社大神楽	831

	(八)奥戸布袋山祇園囃子	832
	(九)奥戸世の中踊り	832
	(三)奥戸餅つき踊り	832

	(二)津軽海峡海鳴り太鼓	832
--	--------------	-----

第三節	民俗	834
-----	----	-----

一	年中行事	834
---	------	-----

二	民謡・俗謡	839
---	-------	-----

第二章

郷土の人物

一

大間の人物

大間群像 873

伊藤五左衛門 874

能登屋市左衛門 874

菊池金吾・雄太郎 874

山崎屋弥兵衛・米澤小太郎父子 875

伝法屋（武内家） 875

熊谷権四郎 876

竹内安五郎 876

佃栄太郎 876

熊谷寛三郎 876

須藤松雄 877

三方言

(一) 世の中節 840

(二) きさらぎやんまの船唄 841

(三) 屋敷直し唄（どんづき唄） 842

(四) 大間灯台仕事唄 842

(五) 大間盆唄 842

(六) 奥戸盆唄 844

(七) 数え唄 845

(八) 奥戸の鼻こ高いか低いか 845

(九) 磯節の替え歌（新磯節） 845

(一〇) 大間四季の歌 848

(一一) 大間稲荷神社神歌 848

(一二) 奥戸餅つき踊り 847

民話・昔話

(一) 地蔵様 860

(二) 佐渡屋池 861

(三) 材木津鼻岬 861

(四) 四十八館 862

(五) 御洒落浜 863

(六) 弁天島由来 864

(七) 弁天島奇談 865

(八) 材木石 866

(九) 金剛院正信さま 866

(一〇) 七郎潟 869

四

民話・昔話 860

三方言

三方言 849

二 大間ゆかりの人物 879

廣谷六郎 877 黄金屋茂兵衛 877 宮野慶吉・正太郎父子 877

安東元格 878 小林弁太・弁太郎・唯八 878 清水時次郎 878

岩瀬千代八 879

菊池成章 879 一戸五右衛門 880 伊能忠敬 880 最上徳内 881

白井秀雄（菅江真澄） 882 秦梶丸 882 漆戸茂樹 883 松浦武四郎 883

新渡戸十次郎 883 大間の会津藩士 883

大間・奥戸・林木地区の旧家と現戸主 884

受章者一覧 886

大間町年表 887

主要参考文献

あとがき

編纂関係者一覧